



NEWS LETTER

International Institute for Advanced Studies

vol. **75**
January
2011

contents



新年(辛卯、平成23年、
2011年)を迎えて
国際高等研究所 所長 尾池 和夫



尾池所長



「能楽」という窓から
～副所長就任にさいして～
国際高等研究所 副所長 天野 文雄



天野副所長



報告書・選書の刊行
「学習の生物学」
「生活習慣病の面白健康科学」



「研究企画会議」
第1回準備会合開催



会議風景



AEDの設置



AED



春を待つ高等研





国際高等研究所 所長 尾池和夫

ご挨拶

新年（辛卯、平成23年、2011年）を迎えて



明けましておめでとうございます。今年も皆さまにとって、より佳い年であるよう、お祈りいたします。

財団法人国際高等研究所は、500名ほどの研究者が、科学と技術と学術のあらゆる分野で、基礎研究に徹底して取り組んでいる研究所です。

異分野の研究者たちの出会いを最重要条件として、さまざまな研究者たちの対話を通じて、近未来の新しい学術の芽を見つけ出してそれを育てるということを基本的な目的として活動します。さまざまな研究者たちのグループで、参加者が徹底して議論を繰り返しています。そこからそれぞれの研究者が、次の世代の研究課題を見つけて持ち帰り、大学や研究所などの研究機関でさらに大きく育てていくことになるのです。

従来の学問の分野を超え、異分野の優れた研究者たちが対話することによって、相互理解を徹底し、緊密な接触を最大の特長として、未知の学術の領域を探し、そこに学術の種を探します。そのような本来の基礎研究の場であることに徹していくことが、この研究所の意義であると考えています。

国立大学や国立研究機関の法人化が進められた結果、研究費の比重が大きく競争的資金に移りました。今後ともその傾向は急激に進む兆しがあります。その傾向が強くなればなるほど、大学などでは、毎年さまざまな評価を受けるために、研究者が比較的短期間に成果が得られる研究課題に重点を置いて研究計画を考える傾向が加速されることになります。また、研究課題も矮小化される傾向が目立っています。

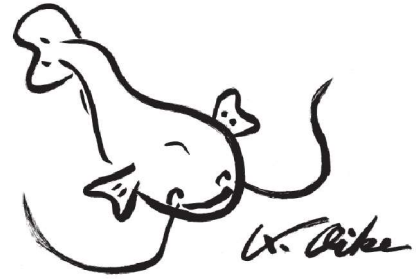
国策からのトップダウンで、科学技術振興を目差すという主旨のプロジェクト研究の影響が、学界全体に大きく及ぼされています。国策

によるプロジェクトは、国際社会の中で日本の存在価値を保つために必要なことですが、一方で学術の水準と将来性を確保するために不可欠である純粋な基礎研究が手薄になっていくという影響も無視できません。基礎研究の基本である広範な分野でのボトムアップによる学術研究の発展が押さえられ、日本における両者のバランスが大きく崩れてきていることが、国内のみならず海外の識者からも指摘され、憂慮されています。その点を国際高等研究所はしっかりと補う役目を果たします。

このような日本の学術の状況の中で、自然科学、人文科学、社会科学等あらゆる分野を超えて、次の世代の学術研究の展開のための「学術の芽」を探索し、それを見つけ、育てるという国際高等研究所の役割は、創立以来の基本理念でもあります。創立時になえられた意義に止まらず、現在の日本の社会の中で、ますます重要性を増大していくことが明らかです。

日本の基礎研究の進展に危機を感じつつ、今年はどうのような年であるかを振り返ってみました。50年前、ときのソ連で、ユーリ・ガガーリンが乗った宇宙船「ボストーク1号」が地球を1周しました。この人類初の宇宙飛行は、1961年4月12日でした。100分あまり飛行したガガーリンは、「地球は青かった」という言葉を残しました。今年2011年は、日本、米国、カナダ、ロシア、欧州の計15カ国が参加して、地上約400キロの上空で建設している国際宇宙ステーションが完成する予定です。それに古川聡飛行士が長期滞在します。このような技術の進展は、数十年にわたる基礎研究の進展があつてこそ生まれるものです。

国連は2011年を「世界化学年」(International Year of Chemistry: IYC2011)としています。マリー・キュリーがラジウムの発見でノーベル化学賞を受賞して100年になるのを記念しまし



た。90か国以上が化学への理解と関心を高めるための活動を連携して展開します。日本国内では、世界化学年日本委員会（委員長は野依良治博士）が設立され、さまざまな行事を企画しています。

また、2011年は、国連の定める「国際森林年」（International Year of Forests）です。国連総会決議により、国際森林年では、現在と未来の世代のため、すべてのタイプの森林の持続可能な森林経営、保全、持続可能な開発を強化することについて、あらゆるレベルでの認識を高めるよう努力すべきであるとされています。

政府の科学技術基本計画（第4期）が3月に閣議決定されます。2011～15年度の5年間に、政府の研究開発予算を25兆円、国内総生産（GDP）の1%分投入する方針です。2011年度予算案では、科学研究費補助金が過去最高の増額とされています。厳しい条件の中で、このような努力に敬意を表したいと思っています。

国際高等研究所では、さまざまな立場で多くの優れた研究者が参加し、研究会を開催しながら基礎研究を進めています。天野文雄、志村令郎、田中成明各副所長とわたしの4名で所長会議を構成し、学術に関するさまざまな実行計画を決め、さらに今年は新しく研究企画会議を立ち上げ、所長、副所長と4名の学術参与で研究プロジェクトと国際コンファレンスなどを計画し、さらに研究推進会議を立ち上げてそれらの実行計画を具体化して行くことにする予定です。その内容は、次つぎと発表しますので、ウェブサイトやニュースレターでご覧いただきたく存じます。

わたし自身も時間の合間を見て、いくつかの研究活動を進めるつもりです。以下にその一部を紹介します。国は原子力利用の基本方針「原子力政策大綱」（05年閣議決定）を見直し、新大綱の原案を年内にまとめる方針です。日本

の原子力発電の技術を海外に売り込む動きも活発化し、電力9社などが設立した新会社、国際原子力開発が活発にビジネスを展開します。

「地球を考える会」の分科会、「原子力リネッサンス分科会」が発足し、わたしもそれに参加します。

去年は生物多様性年で、日本近海が世界で最も生物多様性が成り立っているという調査報告が出されました。その問題を地球科学者たちの中でも議論していて、生物多様性の背景として、日本列島は「ジオ多様性」の成り立っている地域だということをあらためて認識しました。そこで今年、国際高等研究所の中に「ジオ多様性研究会」を立ち上げることにしました。今、広範な分野から多くの研究者が参加して、第1回の研究会の開催に向けて準備しています。

1月17日は、阪神・淡路大震災記念日です。その日に、神戸で「木の家耐震改修大勉強会」が開催され、わたしも参加して基調講演を行います。また、関西サイエンスフォーラムなどとも協力しつつ、地震前兆現象の研究も引き続き進めていきたいと思っています。

人類と多くの生物が共生する地球の歴史と仕組みを理解するために、大地の公園である「ジオパーク」の運動を、地域の人たちの連携によって進めるよう、わたしもさらに努力するつもりです。日本ジオパークをすでに14か所認定し、その中からユネスコの支援する世界ジオパークネットワークに4か所の参加が認められました。この運動を通じて、地球に関する知識の普及に、さらに努力していきたいと思っています。

今年も、財団法人国際高等研究所の活動に、皆さまのご理解、ご支援、ご協力を心からお願いして、新年のご挨拶といたします。

尾池和夫



「研究企画会議」

報告

第1回準備会合開催 (2010年12月7日)

「研究企画会議」第1回準備会合が、正副所長及び4名の学術参加者が出席して12月7日に開催されました。

「研究企画会議」は、従来の「企画委員会」に代えて、正式には来年度(2011年度)より発足するものでありますが、来年度早々に本格的な活動が可能となるよう、本年度においても準備を進めるため、同会合を開催することにしたものです。

今回は、初めての会合であり、まず出席者全員が専門や研究に対する取り組み方や考え方について自己紹介を行ないました。

続いて、尾池所長から「研究企画会議」の設置経緯、目的及び機能について説明がありました。さらに、今回の議論のために用意した資料、すなわちニュースレター73号に掲載の正



副所長座談会「高等研のあり方を考える」、科学研究費補助金審査部会における審査結果の所見、2011年度(平成23年度)科学研究費補助金事業計画調書、本年度(2010年度)の研究プロジェクト等事業計画一覧などについての概要説明がありました。

その後、これらに基づいて、高等研の研究事業のあり方と進め方について議論が交わされました。

議論及び共通認識された基本的考え方：

高等研は「次世代に向けた学術の芽の発掘と育成に関する研究」事業を推進します。

■ 研究事業の目的

従来の学問分野を超えて、異分野の研究者たちの相互理解と緊密な接触を図る場を提供することを最大の特徴とし、この特徴を背景に、自然科学、人文・社会科学等の分野を超えて、次世代の学術研究の展開のために「学術の芽」を探索し、それを発掘し育成することを主たる研究の目的とします。

■ 研究事業の内容(抜粋)

①「研究プロジェクト」の推進

本年度は18の研究プロジェクトを進めていますが、外部意見による「総花的…」、「学際的・分野横断的とは必ずしもいえない…」等の指摘を考慮するとともに、現状の学術の動向と展望、高等研の存在意義も踏まえて、2011年度は主軸研究プロジェクトを2,3に絞り込んで推進します。

②「高等研カンファレンス」の開催

「国内外への情報発信も不十分では…」、「各分野の最先端研究者を招聘できる仕組み…」等の外部からの指摘を考慮し、全く新たに展開する事業として、当面1回/年、1テーマに関する国際シンポジウムを開催します。このテーマは、研究所で実施される研究プロジェクトから選ばれる場合も、また、研究企画会議独自で立案されることもあります。いずれも分野を越えた視野に立ち、広い領域から選ばれることを原則に、国際的にも一流の研究者に参加してもらうものにします。

2011年度は「意識は分子生物学でどこまで解明できるか(仮題)」を、

2012年度は「心の起源(仮題)」をテーマにしたものを計画します。



③「学術動向の調査研究」の実施

研究企画会議のメンバーが中心となり、研究プロジェクトや高等研カンファレンスの企画・立案のために、最先端の学術状況や今後の動向などについて、情報収集や調査研究を行います。

なお、本年度内に第2回準備会合を開催し、今後の研究事業の進め方について、さらに踏み込んだ具体的な議論を行うこととしました。

【次世代に向けた学術の芽の発掘と育成に関する研究】

■「研究企画会議」について：

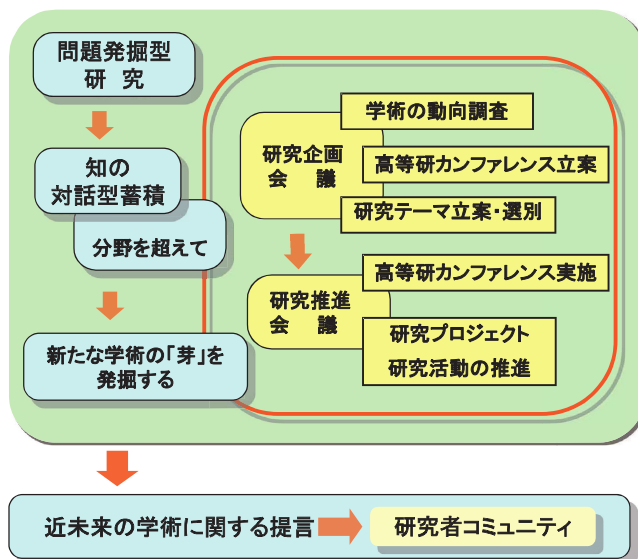
従来の「企画委員会」に代えて、来年度(2011年度)より発足するもの。

このリーダーシップの下に高等研の中核研究事業の基本的考え方とその内容を明確にします。

構成員： 正副所長に加えて新たに選考した4名の学術参与の計8名で構成。

機能：

- ・学術の動向や研究テーマの在り方と展望に関する調査と研究
- ・研究プロジェクトの立案と選定
- ・「高等研カンファレンス」に関するテーマ設定とオーガナイザーの任命
- ・研究推進会議委員、フェロー等の選考
- ・その他 高等研における研究活動に関する諸課題への対応



【期待される効果】

学術における異分野の研究者が積極的に交流する場を提供する本研究所の特色を活かすことにより、次世代の学術研究の課題を探索し、育成することにより、我が国の学術研究の進展に貢献する。

図 本研究事業の基本的考え方

■ 新たに学術参与を委嘱した方々



石井 紫郎 氏
日本学士院会員
東京大学名誉教授(日本法制史)



坂野 仁 氏
東京大学大学院理学系研究科
教授(分子生物学)



政池 明 氏
京都大学名誉教授
(素粒子物理学)



松沢 哲郎 氏
京都大学霊長類研究所教授・所長
(動物心理学・霊長類学)



ご挨拶

国際高等研究所 副所長 天野 文雄

「能楽」という窓から ～副所長就任にさいして～

い うまでもないことだが、一口に研究といっても、その分野は気が遠くなるほど広大である。もちろん、筆者はいつもそんなことを考えているわけではないが、そのことを再認識させられたのは、最近では、2年前に企画委員として高等研にかかわるようになったときで、そこでは、メタマテリアル、脳科学、単分子エレクトロニクス、分子生物学といった分野の問題が、さながら日常会話のようにかわされていたからである。

筆者は能楽(能と狂言の総称)を専門とする人文学分野の人間だが、昨年3月まで大阪大学に23年間勤めていたから、異分野の専門家と比較的接する機会は多かったし、理系の先生方とも多少は交流があったけれど、そのように異分野の専門的な会話の場にいわせたことはなかったのである。

一方、最近、ある出版社から送られてきた日本の地方史研究についての分厚い情報誌を何気なくめくっていて、その分野で刊行されている研究誌の量に驚嘆させられた。しかも、同誌によれば、それでも漏れが相当にあるはずだという。ひとつの分野でも、そこにはやはり広大な世界が広がっているわけである。そして、そのような事情は筆者がかかわっている「能楽」という分野にも言えるのである。

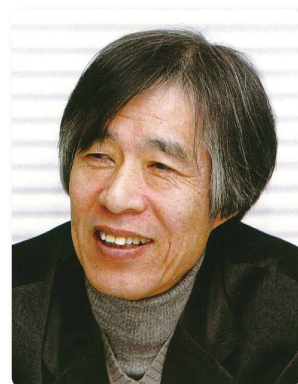
というのは、能楽は文学、音楽、美術などが融合した演劇であり、その歴史は鎌倉時代から現代にまでおよんでいて、それぞれの時代の社会や文化や思想とも密接なかかわりのもとに継承されてきたからである。筆者は大阪大学では、毎年、能楽を材料に内容の異なる講義をしてきたが、それが可能くらい、能楽という分野は広いのである。そのような能楽の研究に携わっていると、おのずから、能楽をとりまくさまざまな文化や社会や思想にもふれるこ

とになるのだが、いつのまにか、筆者はそうやって能楽という窓から物事をみてきたように思う。

このたび、川北稔前副所長のあとをうけて、はからずも副所長に就任することになって、これまでとは異なる立場から高等研にかかわることになったが、そうした習性はたぶんこれからも変わることはない、というより変えられないと思う。さらにいえば、それはだれにもいえることであって、だれしも多かれ少なかれ、自身が培ってきたものから離れることはできないし、また離れる必要もないのである。問題は自身が培ってきたものを、どれだけ異なる視点から見て、その結果、どれだけ新しい世界を切り開くことができるか、ということかと思う。いささか手前味噌になるが、それは高等研がめざしていることとそう隔たってはいないのではないだろうか。

おりしも、今年の秋から筆者が代表となつて、「禅」と日本中世の文化・芸術・社会との関係を考えるという、自身の研究分野を新しい視点から見ようとする高等研の研究プロジェクトがスタートしている。

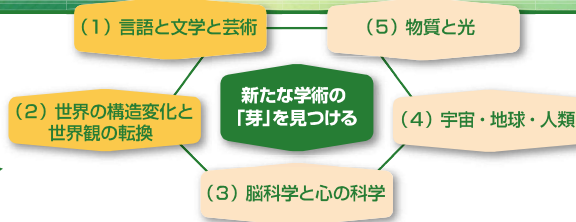
とりあえず、そんなころから高等研での仕事を始めたいと考えている。





紹介

高等研研究プロジェクト紹介



高等研研究プロジェクト紹介

2010年度の研究プロジェクトは、上図のとおり「学術の芽を見つけ、学術の芽を育てる」という課題発掘型の基礎研究を目指し、5つの研究対象のテーマ領域に大別した18プロジェクトを推進。それ以外に、正副所長による研究会やフェローによる研究会などを実施しています。

今回、直近に開催された研究プロジェクト等を下記のとおりご紹介します。

活動履歴等は、高等研WEBサイト：
<http://www.iias.or.jp/research/project.html>をご覧ください。

①研究対象 (1) 言語と文学と芸術

「諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開」

(2009～2011年度・2年次) 研究代表者：高橋 陽一郎

国際高等研究所企画委員／東京大学生産技術研究所特任教授／東京大学・京都大学名誉教授



2011年1月5日～8日
 (於：京都大学数理解析研究所)

②研究対象 (2) 世界の構造変化と世界観の転換

「ジェンダーからみた家族の将来」

(2010～2012年度・1年次) 研究代表者：姫岡 とし子 東京大学大学院人文社会系研究科教授



2011年1月8日
 (於：国際高等研究所 セミナー1)

高等研学術道場の一期生・綾部六郎氏も参画

尾池和夫所長の研究活動紹介

「フォーラム「ジオ多様性」- ジオ多様性とは何か、その重要性を問う -

「ジオ多様性研究会の創立にあたって」より抜粋

～生態系に依存して生きる私たちにとって、生物多様性が地球表層圏における多様性すなわち、ジオ

多様性の上になりたっていることはほとんど認識されていない。・・・ジオ多様性と生物多様性とはどんな関係にあり、どのような問題があるのか。・・・多くの研究者とジオ多様性に関わる諸問題を協議検討し、その重要性を明らかにしていきたい。～



2011年1月14日～15日
 (於：国際高等研究所 216号室)



高等研究成果報告書

No901「学習の生物学」を刊行



- ・研究代表者：星 元紀
- ・書籍版：本文頁数：122頁
- ・価 格：1,800円(税込)
- ・研究年度：2003～2007年度(但し2007年度は報告書とりまとめ年)
- ・ISBNコード：ISBN978-4-906671-71-7
- ・Cコード：C3045

注：お問い合わせ及び申し込みは、(財)国際高等研究所事務局・学術出版担当まで
TEL：0774-73-4000 FAX：0774-73-4005 E-mail：book@ias.or.jp <http://www.ias.or.jp/academic/report.html>

(本書「まえがき」より抜粋)

現在、さまざまな局面において「教育」が深刻な論議をよんでいるが、教育学的な努力のみでは解決が覚束ないのではないかと思わせるほどに問題はますます広がり、複雑になっている。それゆえ、問題を解決するためには統合的なアプローチが求められることは自明であり、世界的にそのような努力が始まっている。(中略)

本プロジェクトは、次のような計画を立てた。

まず第一に、進化生物学や比較神経行動学等の視点から様々な生物系における学習過程を討議する。

第二に、脳科学や発達認知神経科学の視点から、我々の脳における学習の生物学的機構に焦点を当る。そのような理解のうえで、

第三に、情報科学や情報工学を学習及び教育制度に応用が可能かどうか調査・研究する。最後に、これらを統合し、新たなより包括的な教育の概念が確立できないか、さらに生涯を通じたより良い学習及び教育のための制度の構築方

法を見出せないか検討する。

3年16回にわたる研究会での議論を通じて、目標の第一および第二については、かなりの成果を得たと思うが、第三の目標は充分達成できたとはいえず、新たなより包括的な教育の概念の確立や、より良い学習・教育制度の構築にむけての検討という最終目標は、残念ながら今後の課題として残ってしまった。

(研究代表者 星 元紀)





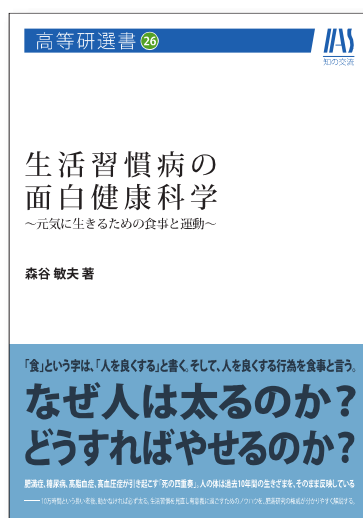
高等研選書

S26 「生活習慣病の面白健康科学」を刊行

紹介

➤ の選書は、2010年10月9日(土曜日)に開催した高等研公開講演会『生活習慣病の面白健康科学～元気
 ➤ に生きるための食事と運動～(講師・森谷教授)』(京都銀行協賛)の講演内容を収録したものを著者が
 読み物として修正加筆等を行い、高等研選書として刊行したものです。

大変分かりやすく、興味深い内容ですので是非ご覧ください。



- ・著 者：森谷 敏夫
 京都大学大学院人間・環境学研究科教授
- ・書籍版：縦書き(本文頁数：101頁)
- ・価 格：1,000円(税込)
- ・ISBNコード：ISBN978-4-906671-70-0
- ・Cコード：C0247

注：お問い合わせ及び申し込みは、
 (財)国際高等研究所事務局・学術出版担当まで
 TEL：0774-73-4000 FAX：0774-73-4005
 E-mail：book@ias.or.jp
<http://www.ias.or.jp/academic/report.html>



森谷教授



講演会の様子

(以下、本書・序にかえて からの抜粋)
 いくつかの誤解や錯覚について

一 序にかえて生活習慣病の始まり

初めに少しお話をしたいのですが、かつての成人病が、なぜ生活習慣病と名称が変わったのかということです。

がんとか糖尿病とか心筋梗塞などの病気を一括りにして成人病と言っていました。ところが、最近になって、小学校の子どもさんが糖尿病になったり、高血圧や高脂血といった症状が出たりして「小学生なのに成人病というのはおかしい」「それなら小児成人病と名前を付けましょう」などと名称をめぐるいろいろな意見が出ました。そうすると、訳が分からなくなってきました、「どうもそうではないのと違うのか」と。

結局、もともと子どもさんが糖尿病などというのは、以前はあまり見かけなかったことなので、おそらく生活の習慣だとか食事とか、いろいろなものが変わってきて起こってきているのではないのだろうかということで、最終的に

生活習慣病になりました。

(中略)

私が生まれたころは、日

本に糖尿病の患者さんなんてほとんどいませんでした。糖尿病を診断するためには診断基準というのがあります。お医者さんがコードにして、この基準を満たしたら、糖尿病というようにして、病名を付けて治療をします。その診断基準はいつできたかご存じですか。これは昭和30年のことです。

つまり、それまで糖尿病の方というのはほとんどいなかったものですから、診断基準が日本ではなかったのです。昭和30年に診断基準ができましたから、カルテに糖尿病ということが書き込めるようになったのです。ですから、日本人でどれくらいの方が糖尿病になったかという記録は、昭和30年から残っているのです。

(本書「まえがき」より)



報告

恒例の消防訓練を実施 (11月16日)

2010年秋の火災予防運動に併せて11月16日に、相楽中部消防組合消防本部の立会のもと、今年の消防訓練を実施しました。

本館厨房からの出火で負傷者が発生したとの想定により、人命救助・通報連絡・初期消火及び避難誘導に関する総合的な訓練を行い、併せて消火器の扱い方について実習を行いました。



職員による消防訓練

消防本部からは、少人数の事務局にあって

も、想像以上にスムーズかつ機能的に訓練が行えたとの評価を得ることができました。また、火災原因は、不注意による失火か地震に伴う出火が考えられるので、火災を起こさないように日頃から注意することを心がけて貰いたいとの講話がありました。

高等研では、年間を通じて外部から多くの研究者等の方々が来所されますので、防火・防災意識の高揚と、万一の場合に備えて、人命第一での的確な避難誘導及び安全確保が行えるよう心がけたいと考えております。



消防訓練の様子



お知らせ

AED (自動体外式除細動器) の設置 (12月17日)

高等研では、去る12月17日にAED (自動体外式除細動器) を設置しました。

昨年10月に事務局職員を対象として普通救命講習会を実施し、AEDを含む救命に関する応急措置について実際に体験することを通じて救

命救急の重要性を認識することができました。

(NL74号・10P参照)

高等研には研究会参加者を始め、公開講演会などのイベントで年間2,000名もの幅広い年齢層の来訪者があります。万一の場合にも迅速で的確な応急措置が行えるようにAEDを導入したものです。事務局員誰もが、昨年の救命講習会の体験が活きるよう心がけてまいります。



お知らせ

「天野文雄 副所長の就任 (12月1日)」

2010年9月30日付けで退任された川北稔前副所長 (イギリス近世史・世界システム論) の後任として、天野文雄国際高等研究所企画委員・大阪大学名誉教授 (能楽研究) が、

2010年12月1日付けで副所長に就任されました。



尾池所長から天野副所長への委嘱



事務局便り

「存在の意義」

年末12月28日の早朝、高等研の辺りでは今年の初雪が降りました。「雪は天からの手紙」、子供の頃の教科書に載っていた文章を思い出します。これは中谷宇吉郎博士（昨年が生誕110年）の言葉ですが、実際に降って来た雪の結晶の形を中谷博士が編出した中谷ダイヤグラムに当てはめると、上空の温度が一目で分かるというものです。

「桃李不言下自成蹊」、これは史記の李將軍伝に出てくる有名な言葉で、桃やスモモは自ら何も語らずとも、その果実を求めて人々が集まり、その下に自然と小道ができるということのたとえとして、徳のある人には何ら特別なことをせずとも自然と人々が集まって服するということを意味するとされ、司馬遷が李広という人物を称賛する中で使われています。

雪の結晶や果実の存在と人との関わりを上手く言い表していると思われ、私の好きな言葉ですが、結晶の形という存在が貴重な天気に関わる情報を人に与え、桃やスモモの存在が人に嗜好という喜びをもたらす。人徳については何をかいわんやですが、存在するということの意義が分かり易く伝わります。

高等研の存在とは、高名な先生の言葉をお借りすると「唯一無二」。日本に高等研は2つ要らないが、1つは絶対に必要というもの。現在、高等研は設立後、既に四半世紀が過ぎ、新たな段階に達したと考えられますが、改めて高等研の存在意義とは、高等研の目指す公益性とは何かを考える機会となります。それは設立当初から何も変わる事のない学術の王道を極めるために基礎研究を推進することと言えるのではないのでしょうか。

奥田東先生（初代理事長）の「何を研究するかを研究する」という高等研の活動理念を表す言葉は、今では「学術の芽を見つけ、それを育てる」という言い方で説明ができるようになり

ました。高等研のこれまでの27年間の研究活動の成果以上に、高等研という器から、新しい学術の創生につながる機能が発揮されるとき、自ずと学者の目が高等研に向き、ひいては人々の関心にもつながることが期待されます。高等研の存在を思うとき、様々な言葉の重みを感じる今日この頃です。

「高等研の風物詩」

正月とは、本来その年の初めに歳神様を迎える行事とされ、門松は神様が降りてくる目印となる依代（よりしろ）として、しめ縄は神を迎えるに相応しい清浄な場所であることを示し、旧年中の邪や不浄を祓い清める意味で飾るものとされています。

高等研では、今年始めて正門と西副門にこの松飾り（門松）を立て、正面玄関と副玄関にしめ飾り（しめ縄）を飾って新年を迎えました。学術文化を担う高等研にあっては、わが国の伝統的な風習、文化的な慣わしに親しむことも重要であるとの認識からです。

研究本館内には2箇所鏡餅も飾り、新年を迎えるに当たり、新しい目標に向かって神聖な気持ちで臨むという正月らしい風情を醸し出しました。（事務局・ma）



事務局便り





研究活動実績 (2010年11月1日～2010年12月31日)

報 告

研究プロジェクト	開催日	研究代表者	参加者数
アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築	11月 4日(木)～ 6日(土)	藤 田 治 彦	10
メタマテリアルの開発と応用(幹事会)	11月 5日(金)	石 原 照 也	5
メタマテリアルの開発と応用	11月 5日(金)～ 6日(土)	石 原 照 也	51
受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合	11月12日(金)～ 13日(土)	ジュリー ブロック	12
近代精神と古典解釈: 伝統の崩壊と再創造	11月26日(金)～ 27日(土)	手 島 勲 矢	13
交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために	11月26日(金)～ 27日(土)	松 岡 博	12
ナノ物質量子相の科学(幹事会)	11月27日(土)	金 森 順次郎	8
研究成果のとりまとめ会合「エネルギー科学における多階層連結コンピューティング」	11月27日(土)	三 間 囃 興	10
新技術振興渡辺記念会科学技術調査研究助成事業 「製造業における知的資産の評価と開示方法に関する調査研究」	12月 4日(土)	岩 田 一 明	9
文化財保存科学フォーラム「中国敦煌・龍游遺跡調査報告と文化財保存への提言」	12月10日(金)	谷 本 親 伯	21
フェロー研究会「十八世紀における世界観の多元的交錯」	12月10日(金)～ 11日(土)	石 川 文 康	4
数量的アプローチによる日本経済の比較史的研究 於: 東京大学	12月11日(土)	宮 本 又 郎	15
天地人ー三才の世界: 宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造 於: 京都市内	12月13日(月)～ 14日(火)	尾 池 和 夫	19
意識は分子生物学でどこまで解明できるか?	12月14日(火)	山 森 哲 雄	4
21世紀における文化としての設計科学と生産科学	12月17日(金)～ 18日(土)	岩 田 一 明	7
宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究ー禅をケーススタディとしてー	12月17日(金)～ 18日(土)	天 野 文 雄	21
宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略	12月22日(水)～ 24日(金)	海 部 宣 男	28
交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために(幹事会)	12月24日(金)	松 岡 博	3



研究活動予定 (1月1日～3月31日)

カレンダー

開催予定日	研究プロジェクト	研究代表者
1月 5日(水)～ 8日(土)	諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開 於: 京都大学	高 橋 陽一郎
1月 7日(金)	文化財保全技術	志 水 隆 一
1月 7日(金)～ 8日(土)	研究成果のとりまとめ会合「スンマとシステム」	亀 本 洋
1月 8日(土)	ジェンダーからみた家族の将来	姫 岡 とし子
1月 12日(水)	新技術振興渡辺記念会科学技術調査研究助成事業 「製造業における知的資産の評価と開示方法に関する調査研究」 於: 東京	岩 田 一 明
1月 14日(金)～ 15日(土)	フォーラム「ジオ多様性」-ジオ多様性とは何か、その重要性を問う-	尾 池 和 夫
1月 20日(木)～ 22日(土)	アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築	藤 田 治 彦
2月 17日(木)	意識は分子生物学でどこまで解明できるか?	山 森 哲 雄
2月 18日(金)～ 19日(土)	2010年度第3回企画委員会	尾 池 和 夫
2月 19日(土)	公開講演会「ヒトの心と社会の由来を探るー霊長類学から見る共感と道徳の進化ー」	山 極 寿 一
2月 20日(日)～ 21日(月)	フォーラム「複雑系情報の社会への発信システム」	尾 池 和 夫
2月 22日(火)～ 23日(水)	諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開	高 橋 陽一郎
2月 25日(金)～ 26日(土)	交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために	松 岡 博
2月 25日(金)～ 26日(土)	単分子エレクトロニクスの現状認識と近未来実現へ向けての中核体制構築	夢 田 博 一
2月 25日(金)～ 26日(土)	フェロー研究会「十八世紀における世界観の多元的交錯」	石 川 文 康
3月 4日(金)	意識は分子生物学でどこまで解明できるか?	山 森 哲 雄
3月 5日(土)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学	岩 田 一 明
3月 5日(土)	フェロー研究会「有明海森里海連環再生研究会」	田 中 克
3月 8日(火)～ 12日(土)	第18回「コンピューショナル・マテリアルズ・デザイン (CMD) ワークショップ」	赤 井 久 純
3月 11日(金)～ 12日(土)	メタマテリアルの開発と応用 於: 東京	石 原 照 也
3月 12日(土)	ナノ物質量子相の科学(幹事会)	金 森 順次郎
3月 25日(金)～ 26日(土)	地震予知研究シンポジウム(関西サイエンスフォーラムおよびSEMS研究会と共催)	尾 池 和 夫
3月 28日(月)	フォーラム「ジオ多様性」-ジオ多様性とは何か、その重要性を問う- 於: 東京	尾 池 和 夫



高等研就業カレンダー (2月～4月)

カレンダー

2	3	4
19日: 公開講演会		
日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土	日 月 火 水 木 金 土
1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	1 2
6 7 8 9 10 11 12	6 7 8 9 10 11 12	3 4 5 6 7 8 9
13 14 15 16 17 18 19	13 14 15 16 17 18 19	10 11 12 13 14 15 16
20 21 22 23 24 25 26	20 21 22 23 24 25 26	17 18 19 20 21 22 23
27 28	27 28 29 30 31	24 25 26 27 28 29 30